

TOPICS

トピックス

（一財）近畿市町村災害復旧相互支援機構［KDMサポート］

―災害査定のための資料作りをお手伝いします！―

近畿地方の6市町が設立者となり、令和3年7月に一般財団法人近畿市町村災害復旧相互支援機構［KDMサポート］（以下、「支援機構」）が発足しました。

1．頻発する災害と市町村の課題

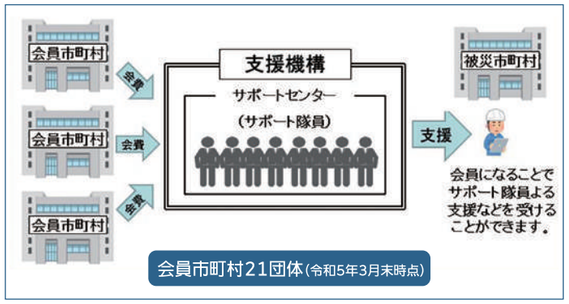
近年、全国各地で水害や土砂災害が頻発し、市町村が管理する道路や河川などの公共土木施設が多くの被害を受けています。これらを速やかに復旧するため、市町村は国庫負担の災害復旧事業を実施しますが、国庫負担を受けるためには、国による災害査定を受けなければなりません。市町村においては災害査定のための設計書や申請書類を作成する技術系職員が不足しています。また、災害発生時には、避難所設置や被災調査、住民への情報提供、捜索・救助活動等、多岐にわたる初動・応急対応を実施する必要があるため、災害査定の資料作りに手が回らないことが懸念されています。

2．市町村の相互協力による支援の仕組み

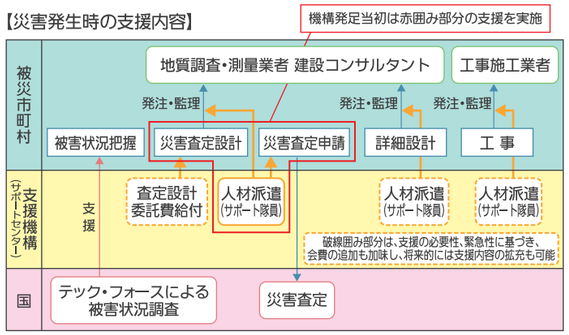
支援機構の目的に賛同する近畿の市町村が会員となり、会員市町村の要請に基づき、災害復旧及び災害査定の実務経験を有する行政経験者（サポート隊員）が支援を行います。

平時は会員市町村の技術職員の災害対応力向上に資する研修会等を実施しています。

【制度の概要（被災時のイメージ）】



【災害発生時の支援内容】



（一財）近畿市町村災害復旧相互支援機構ホームページ
https://kinki-shienkiko.or.jp/ 相互支援機構

3．支援機構の活動状況

令和3年7月の支援機構発足以来、右記令和4年10月の兵庫県宍粟市に続き、令和5年6月に奈良県五條市、同年10月に京都府福知山市にサポート隊員が出動して災害現場を確認し、復旧工法等で気になる点について意見交換を行いました。

支援制度に関心のある市町村ご担当者は（一財）近畿市町村災害復旧相互支援機構事務局【一般社団法人 近畿建設協会（06-6941-0181）川上、奥田】へお問い合わせください。


サポート隊員が出動した宍粟市千種市民局の現場（令和4年10月）



本誌は、近畿の「道の駅」、一部の府県および公共施設などに配布しています。
インターネット環境をお持ちの場合は、
https://kyokai-kinki.jp/archives/category/public_magazine
においても最新号とバックナンバーをご覧になれます。

誠に申し訳ございませんが、バックナンバーの配布は行っておりませんので、ご了承ください。

編集後記

今月の川シリーズでは「飛鳥川」を取り上げました。古代の都には水に関わる多くの構造物が作られており、河川の乏しい奈良盆地で水がいかに貴重であったことかと感じました。現代では紀の川水系や淀川水系からの水が農業用水や水道用水として利用されています。また、「枕草子」には「河は飛鳥川。淵瀬も定めなく、いかならむと、あはれなり」と、変化する川の代表として飛鳥川が挙げられています。昔の人も、出水によって変化し続ける多様な環境が河川の本質であると考えていたようです。

【担当：森川 一郎、益倉 克成、和田 桂子、鈴木 里奈、服部 龍雄】

水が語るもの
第27号 令和5年12月発行
（年2回発行）

発行 一般社団法人 近畿建設協会
〒540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31 OMM
TEL 06-6941-0246 FAX 06-6941-0180
編集 一般財団法人 近畿地域づくり研究所 誌面に関するお問い合わせ先
協力 株式会社 近畿地域づくりセンター mizugakatarumono@kyokai-kinki.or.jp

「水が語るもの」はインターネットでもご覧になれます。
https://kyokai-kinki.jp/archives/category/public_magazine 水が語るもの 検索

VOC FREE
FSC ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C000000
この印刷物は環境配慮型印刷を採用しています。

みずからまなぶ情報誌
2023.12 第27号

水が語るもの



表紙写真
奈良県明日香村『飛鳥川』

目次

3 水ものがたり
世界の川と水インフラ(13) –ナイル川(その2)–
京都大学名誉教授 (公財)河川財団研究フェロー 池淵 周一

6 川シリーズ
古代の都を流れる川 飛鳥川

10 世界の水
水辺空間を生かした都市再生の事例 –ヨーロッパ:フランス・セーヌ川からの景観–
工学博士 元大阪産業大学教授 中野 雅弘

12 水を訪ねて
水と大地がつなぐ地域のきずな 木津川上流
(一社)近畿建設協会 水環境研究部門 顧問 京都大学 防災研究所 特任教授 和田 桂子

14 京都の水文化(その10)
木津川の「縦の水運」、「横の水運」 ~集落や人をつなぐ価値~
京都産業大学 現代社会学部 教授 鈴木 康久

18 水と文学
染織の故地を訪ねて
評論家・文化プロデューサー 河内 厚郎

22 みんなの水辺
「おかん」が主役になる川との関わり ~身近な河川へ日常的に楽しくかかわるプロジェクトの紹介~
結 creation 北村 美香

24 うぉーたーねっと
水都大阪と幻の大阪大国技館(19)
水都の会 城北川プロジェクト 代表 藤井 薫

26 排水機場訪問記 – 関係者に聞く –
由良川(福知山市域)
近畿水管理・国土保全研究会 梅田 和男

28 トピックス
(一財)近畿市町村災害復旧相互支援機構[KDMサポート]





ティシサットの滝

水ものがたり

世界の川と水インフラ(13)

–ナイル川(その2)–

京都大学名誉教授
(公財)河川財団研究フェロー
池淵 周一



前号でナイル川の概要とダムについて述べたので、本号では、運河と堰の水インフラ施設とともに、ナイル川周辺の水にかかわる遺跡や自然について述べることとする。

運河と堰

サッド湿地帯で大量の水が蒸発散で失われることから、バイパスして下流に抜き、沙漠の灌漑に役立てようとサッドを迂回する長さ300kmの運河の建設がエジプト政府によって構想された。これが図—1中にあるジョン・グレイ運河である。私が30代でアメリカの大学に滞在していたころ、アメリカのエジプト計画の一つのプロジェクトとしても検討されていた。そのスケールの大きさに驚愕するとともに、広域水循環モデルの構築が進められていることに刺激された。掘削が開始され、7割方終わっていたがスーダンの内戦の勃発や多大のコスト、大湿地帯で生活する人々の居住、動植物の繁殖・生息の重要性の認識の高まりなどから工事は中断され、現在も完成に至っていない。

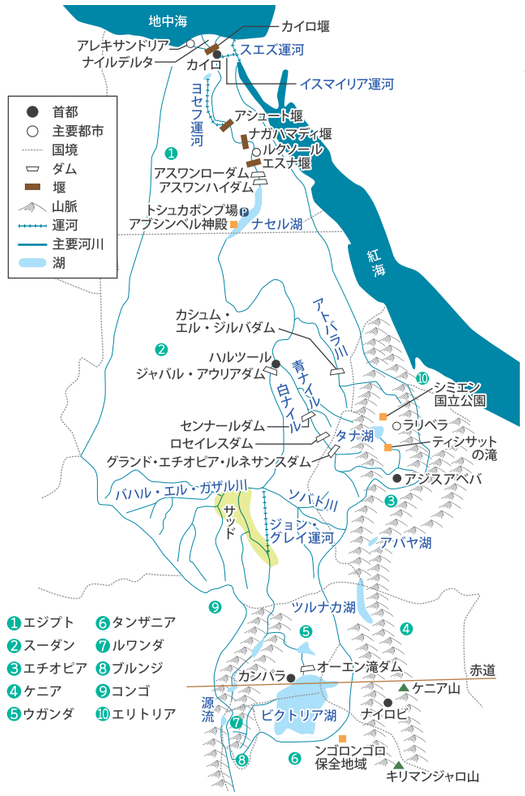
ナイル川の流域ではないが、エジプトにとって重要な運河にスエズ運河がある。地中海と紅海を結ぶ運河で、1869年に開通。全長193・3km、最大水深24m。1956年、スエズ動乱によってエジプトが国有化、現在はエジプト政府が直轄・運営している。カイロからこのスエズ運河に繋がっているのがイスマイリア運河である。その他、アシュート堰からナイル川に沿って沙漠に延びるヨセフ運河もある。

取水堰についても、アスワン・ハイ・ダムから下流にエスナ堰、ナガハマディ堰、アシュート堰がある。これら取水堰で水位を上げて運河や水路に導水し揚水して耕地を灌漑する。その分、ナイル本川の水は減っていく。取水堰にはいずれも左岸側に閘門が設けられている。

最下流にあるカイロ堰は1840年代に建設されたもので、多数の支流と運河に水が配分されている。ナイルデルタはナイル河口に広がる三角州地帯で世界最大級。デルタの勾配が極めて緩いので、そこに水路網と排水路網が巧妙に仕組まれており、広大な農地に水が通年供給され、大穀倉地になっている。ただ、勾配が緩いため海水が内陸部まで浸透するので地下水の塩分化・塩害が懸念されている。

ベイスン灌漑とナイロメータ

雨の降らないエジプトではナイル川の水そのものが灌漑用水の源であった。毎年季節的に増減するナイル川の水を巧みに灌漑用水に給するベイスン灌漑が古来考察され、それにはナイル川の水位観測が必須であった。写真に見られるナイロメータなる水位観測施設は、川岸に点在する神殿に設置され、水位を刻み続けている古代遺跡である。



図—1 流域概況


①


②

①ナイロメータ
②ピラミッドとスフィンクス

エジプトのピラミッドは138基発見されているが、すべてナイル川の西岸地区にある。カイロ郊外ギザ地区にあるクフ王のピラミッドとスフィンクスを訪ねた。古代エジプトの王の墓で、上流石切場から運ばれた石灰岩の巨石で外面を四角錐状に積み上げた3基の巨石構造物で、内部はミイラ保存のため花崗岩で構成されている。スフィンクスがそれらピラミッドを見守るように鎮座している。

カイロ市内の広場にあるエジプト考古学博物館は世界最大のエジプトの遺物を展示する博物館で、見学に値する。

カイロから高速道路を走り、アレキサンドリアに向かう。途中、灌漑水路や揚水機、農地の広がりを見ながら、ナイル川西流の河口近くまで行くが、川べりにはピラニアの養殖いけすが多数あり、養殖漁業になっている。ピラニアはフナなどに似ており、水が相当汚れているのでは。警備の警察官の許可を得てロゼットストーンで有名な最河口端に立つ。白ナイル川と青ナイル川の合流点から約3,000㎞を下って河口に到達したことに感無量。と同時に、ダム、堰などで大量の水がとられ、目の前の水の少なさに驚愕した。地中海に面したアレキサンドリアは人口1，200万人、エジプト第二の都市である。

アブ・シンベル神殿やルクソール神殿

アスワン・ハイ・ダムの建設により水没したアブ・シンベル神殿はユネスコの救援事業で60m近く上に移設されたが、約3300年前の大岩窟神殿にはラムセス2世像を収めた大神殿と最愛の王妃ネフェルタリのために建造された小神殿が眼下にナセル湖を見下ろすがごとく威風堂々と復元されている。内部には多くの列柱や壁画があり、象形文字が見事に描かれている。巨大古代遺跡の移設工事の凄さと遺跡内容物に感動した。

ルクソールは古代エジプトの都市テーベがあった地で、ルクソール神殿やツタンカーメン、ラムセス3世の墓がある王家の谷、王妃の谷など王族の墓が多数遺されている。

ナイル川の大支流白ナイル川と青ナイル川が合流する地がスーダンの首都ハルツームである。早朝からコーランの聖なる詠唱が聞こえてくる。イスラム教の信奉者が多いことを実感した。クルーズ船に乗り、両川の水の色を外観した。4月という流量の少ない時期ではあったが、細かい粒子分を含む白ナイル川の白濁した色とタナ湖から流れ下るプランクトンを含む青ナイル川の水の色を実感した。ハルツームのバザール（市場）を見てまわったが、1mを超えるナイルパーチや肺魚、ナマズなどが水揚げ、水洗い、さばかれ、所狭しと道路にまで並べられ、売り手と買い手のやり取りが活気にあふれていた。


ハルツームの魚バザール

ケニア、タンザニアには多くの自然国立公園

ケニアの首都ナイロビは標高約1，700m、年平均気温17・5度としのぎやすい。ビルが林立し、緑も多い。町中は活況があるが、治安は悪そう。国際会議で訪ねた当時、外出禁止だった。都市部を離れると、大地溝帯特有の湖沼や広大な自然地が広がり、多くは自然国立公園になっている。シマウマ、ゾウ、インパラ、ヌー、キリン、ライオン、サイ、水牛など多くの野生動物を見ることができ、ある湖では100万羽ともいわれるフラミンゴの大群を見ることもできる。

ケニアからタンザニアへの入国は簡単であった。国境付近は熱帯雨林に覆われていたが、やがて高原・丘陵地になり、所々で果樹や農作物が栽培されている。途中、民族衣装を着飾ったマサイ族の集団に出会った。サハリが楽しめるンゴロンゴロ保全地域に入った。ンゴロンゴロ保全地域は南北約16㎞、東西約19㎞のクレータの底を中心とした保全地域で4WDの車に乗ってサファリを楽しんだ。ここでもキリン、ゾウ、インパラ、ヌー、ライオン、シマウマ、ガゼル、ジャッカル、バッファロー、サイ、ハイエナなど多くの野生動物を見ることができ、湿地にいるカバにも遭遇。何頭ものゾウがゾロゾロ近づいたのには怖さもあったが、野生動物を身近にみることの感動は大きかった。

ンゴロンゴロ保全地域の近くにはセレンゲティ国立公園もある。約14，760㎢と広大でサファリも楽しめる。ヌーの大群を見ることもできる。この平原を流れる川はビクトリア湖に入る。キリマンジャロ山麓に広がる平原地にも行ったが、平原を歩くゾウの雄姿とキリマンジャロ山の美しい山容を遠望することができた。


③


④

③水牛とフラミンゴの大群
④アフリカ象

タナ湖とキリスト教会群、そしてシミエン国立公園

エチオピアの首都、アジスアベバは標高2，400m、年平均気温16度。ビルが建ち並び、車も人も多いが喧噪は感じられない。キリスト教信奉者でもエチオピア正教を信仰する人が多いとか。周辺では羊やヤギの群れも行き交う。北に向かう道路沿いには、小規模な灌漑水路を介して農地が広がっている。さらに北上し、タナ湖に向かう。

タナ湖はアフリカ地溝帯に沿って点在する湖の一つで、エチオピア最大の湖で青ナイル川の源流である。長さ84㎞、幅66㎞、最大深さ15m、面積3，500㎢（琵琶湖の約5倍）をもつ湖である。湖岸にはアフリカトカゲが、ときにはカバの生息も見られ、湖辺にはパピルスが繁っている。37の小さな島が点在し、島には29もの修道院が散在している。その一つの修道院を訪ねたが、藁と泥で固めた土壁で囲まれた大きな建物の中には一面に美しい宗教画が張り巡らされている。


十字架の形をした聖ギオルギス教会

タナ湖の遙か東にあるラリベラに向かった。巨大な一枚岩を掘り抜いて造られた12の岩窟教会群があり、キリスト教聖地として1978年に世界文化遺産に登録された。長さ33・7m、奥行き23・5m、高さ11・5mの聖救世主教会は最も規模が大きく、やはり一枚岩で彫り抜いて造られている。またラリベラのシンボルともいわれる聖ギオルギス教会は十字架の形をした教会である。一枚岩を彫り下げて造り、内部には柱がない彫り抜き状態になっている。

タナ湖から26㎞下流にティシサットの滝がある。約45mの高さから途切れることなく水が流れ落ちている。眼下に急流が流れている。雨期になり、水かさが増すと滝幅は400mにもなり、壮観だとのこと。

エチオピア最高峰ラスダッシュ山（標高4，533m）を頂く国立公園、シミエン国立公園がある。面積220㎢、4，000m級の山々が連なり、大地にできた深い割れ目のような崖が続く。

トレッキングしたが、深い峡谷、その斜面に立つアイベックス、道路沿いで草を食べる固有種のゲラダヒヒが厳しい環境の中で生息している姿に感動した。

エチオピアはコーヒー発祥の地といわれており、町中でエチオピアコーヒーを飲み、農村地でイネ科のテフをオーブンで焼いたパンケーキのような主食インジェラも食べ、食文化も楽しんだ。


シミエン国立公園から見る断崖峡谷


草を食むゲラダヒヒ

参考文献　1. 浅野倫矢：大規模水体および氾濫を考慮した陸域水循環モデルの開発ー白ナイル流域の水資源量評価、京都大学大学院工学研究科修士論文（2015年2月）
2. 池淵周一：世界の水ーナイル川を観望『水が語るもの第3号（2010年9月）』　3. ダムなどの諸元はWikipediaから検索・位置はGoogle earthから確認


漏刻の木樋の位置を示した水落遺跡

飛鳥水落遺跡（みずおち）5

斉明天皇の息子である中大兄皇子が造ったとされる日本初の水時計「漏刻（ろうこく）」の跡です。飛鳥川の水を使って時を計っていました。

石神遺跡（いしがみ）6

石神遺跡では、発掘調査で掘立柱建物群や方形池などが見つかっています。噴水機能をもつ須弥山石（しゅみせんせき）や石人像（せきじんぞう）といった石造物が掘り出され、迎賓館跡と考えられています。


飛鳥資料館にある石人像のレプリカ

飛鳥川上坐宇須多伎比売命神社（あすかかわかみいますうすたきひめのみこと）1

皇極天皇みずから祈雨の祭祀を行い恵みの雨をもたらした（642年、日本書記）とされる、飛鳥川の上流に位置する神社です。南淵山をご神体とし、境内まで200段近い石段を登ります。日本一名前が長い神社だそうです。


飛鳥川の飛び石

飛鳥川の飛び石 2

石橋の傍らに、万葉集の「明日香川 明日も渡らむ 石橋の 遠き心は 思ほえぬかも（大意）あなたに対して遠くはなれた気持ちなど持っていません。」の歌碑があります。心のつながりを飛鳥川にかかる飛び石の橋に託したもののようです。


飛鳥川上坐宇須多伎比売命神社


謎の石造物・酒船石

酒船石（さかふねいし）（酒船石遺跡）9

酒の醸造、油絞り、砂金精選、曲水の宴など様々な説があり、用途は不明だそうです。平成4年に酒船石が置かれた丘陵で石垣状の遺構が発見され、平成10年には亀形石造物が発見されたことから、これらを併せて酒船石遺跡と呼ばれています。


飛鳥京跡苑池
【出典：第5次調査現地説明会資料】

飛鳥京跡苑池 7

飛鳥宮の庭園跡です。池は石積みの護岸がなされ、底には石が敷き詰められていました。池の南側には、高さ1.65mの噴水用の石造物が設置され、斉明天皇が海外からの賓客をもてなしていたと考えられています。



石舞台古墳 8

わが国最大級の石室を持つ方形墳。露出した天井石は南側が約77ｔ、北側が約64ｔもあるといわれます。蘇我馬子の墓とする説が有力です。


甘樫丘前の飛鳥川

川シリーズ THE RIVER

―古代の都を流れる川―

飛鳥川

飛鳥川が流れる明日香の里は、「石と水の都」とも呼ばれ、水にまつわる多くの遺跡が残されています。古代の人々にとって水は、宮都を造る上で不可欠なものであり、祈りの対象でもあったようです。

飛鳥宮跡の大井戸跡

飛鳥宮跡（あすかきゅうせき）10

大化の改新の舞台となった伝板蓋宮（いたぶきのみや）跡とされてきましたが、飛鳥板蓋宮だけでなく飛鳥岡本宮（舒明天皇）、後飛鳥岡本宮（斉明天皇）、飛鳥浄御原宮（天武・持統両天皇）など、複数の宮が継続的に置かれていたことが判明し、平成28年に名称が「飛鳥宮跡」に改められています。現在復元されている石敷広場や大井戸跡は飛鳥浄御原宮のものだそうです。

発掘された大溝
【出典：飛鳥女史紀行HP】

狂心渠（たぶれごころのみぞ）

酒船石遺跡には天理砂岩（天理市石上山で採れた砂岩）が使われており、日本書紀に、斉明天皇が大量の石材を運ぶために大運河を掘らせ、人々はこれを「狂心渠」と呼んだと記されています。飛鳥東垣内遺跡では、その一部と考えられる幅約10m、深さ約1.3mの南北の大溝が発掘されました。


水の祭祀が行われたとされる亀形石造物

亀形石造物（酒船石遺跡）9

斉明天皇の時代に造られたとされる、長さ2.3m、幅約2mの亀の姿の石造物です。南側の湧水施設から船形の貯水槽へ、さらに亀形石造物へと水が流れ、亀の口から水が入り尻尾から出る構造になっています。この場所で何らかの祭祀が行われたものと考えられています。


棚田の「かかしコンテスト」

稲渕の棚田（いなぶち）3

平安～室町時代に開墾され、日本の棚田百選にも選ばれた稲渕の棚田は「奈良県景観遺産」にも指定されています。彼岸花の県下有数の自生地でもあります。

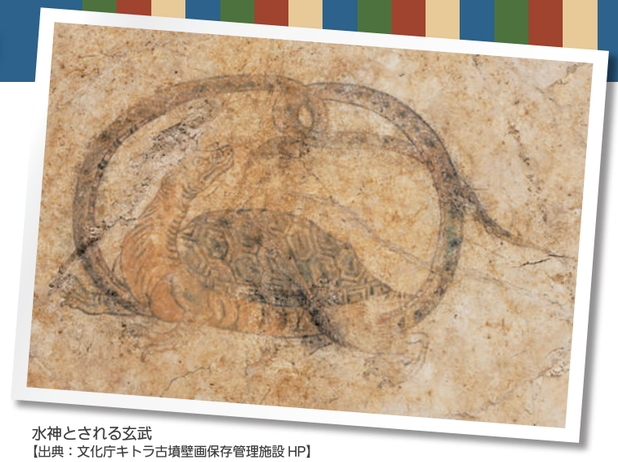
稲渕の男綱 4

奥飛鳥の稲渕集落に入る手前で、飛鳥川の上を掛け渡された男綱の下をくぐります。豊作と子孫繁栄を願い、川下からの災厄や疫病を封じる意味合いがあるとされます。上流の栢森集落の手前には女綱もあり、毎年１月初旬には男綱と女綱を掛け替える綱掛神事が行われます。


稲渕集落の入口に張られた男綱

参考資料 明日香村公式HP／奈良県HP／明日香村観光ポータルサイト／あおによしなら旅ネット／飛鳥女史紀行HP
奈良文化財研究所飛鳥資料館HP／井上さやか「古代飛鳥の聖なる水」万葉古代学研究年報21巻（2023）

国営 飛鳥歴史公園



水神とされる玄武
【出典：文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設 HP】

今年は昭和58（１９８３）年に明日香村のキトラ古墳石室内において極彩色壁画の「玄武」が発見されてから40年の節目の年になります。「玄」は北・冬を象徴する黒を、「武」は甲羅で武装する亀を意味し、蛇が亀に絡みつく姿で描かれ、北方を守護する「水神」と言われています。

平成28年９月にはキトラ古墳を囲む「キトラ古墳周辺地区」が国営飛鳥歴史公園の最も新しい５番目の地区として開園されました。

国営飛鳥歴史公園の概要

国営飛鳥歴史公園は、飛鳥の豊かな自然と文化的遺産の保護、活用を図る一環として、国土交通省によって整備された公園です。飛鳥川周辺にある「祝戸地区」「石舞台地区」「甘樫丘地区」の３地区と、「高松塚周辺地区」「キトラ古墳周辺地区」の計５地区に分かれており、近年は年間80万人前後の来園者があり、うち奈良県以外の近畿圏内から約４割、近畿圏外からが約２割（令和４年）と、広い地域から多くの方が訪れています。



甘樫丘地区の展望台からの眺望 手前の木立の下に飛鳥川が流れる
【提供：国営飛鳥歴史公園事務所】

近年の取り組み

平成29年の都市公園法改正により、都市公園において民間資金を活用する「Ｐａｒｋ－ＰＦＩ制度」が位置付けられました。国営飛鳥歴史公園では祝戸地区で宿泊研修施設として使用されてきた「祝戸荘」とその周辺について「Ｐａｒｋ－ＰＦＩ制度」を活用し民間事業者による再整備・運営管理を通じて地域の観光振興に貢献することにしており、令和５年度着工、令和６年度夏頃供用開始予定だそうです。

また現在、奈良県や明日香村等の周辺自治体が連携し、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の令和８年度世界遺産登録を目指した取り組みが進められているほか、明日香村では「明日香まるごと博物館地域計画」を推進しており、さらに文化庁では令和11年度までの供用開始を目指し「高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称）」の設置が検討されています。こういった公園を取り巻く状況の変化等を契機として、老朽化が進む国営飛鳥歴史公園館の整備等、高松塚周辺地区再整備の検討が始められました。高松塚周辺地区は近鉄飛鳥駅にも近く、飛鳥周遊の起点として魅力や利便性のさらなる向上が期待されます。



国営飛鳥歴史公園位置図

参考資料　文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設 HP ／国営飛鳥歴史公園事務所 HP
国営飛鳥歴史公園（高松塚周辺地区）の現状と課題【第２版】（高松塚周辺地区再整備方針検討委員会第２回委員会資料）

神奈備の郷・川づくり

奥飛鳥は「神奈備の郷（神様のおられるところ）」とも呼ばれ、国の重要文化的景観にも選定されています。一方で、下流域では内水被害が発生しており、奥飛鳥の景観にそぐわないコンクリート護岸があるなど課題もありました。このため河川管理者である奈良県と、学識経験者、明日香村、住民等により「神奈備の郷・川づくり整備検討委員会」が設置され、平成14年に策定された「神奈備の郷・川づくり計画」に基づき、奥飛鳥の歴史風土・景観にふさわしい水辺の創出が進められています。



遊水部では、遊水効果によって下流域の治水安全度向上を図るとともに、ゆったり流れる水辺環境の創出をめざし、親水性の改善や自然の渓流をイメージした緩傾斜落差工の整備などが行われています。創出ゾーン〔河道部〕では、現況のみお筋（瀬・淵）の保全、遊歩道・多自然護岸などの整備が行われ、保全ゾーンでは現況の自然環境が保全されています。

江戸時代の街並みを残す「今井町」


今井町の街並み


今井町の環濠

飛鳥川は、明日香村から橿原市にかけて広がっていた藤原京の跡を流れ、その後、奈良盆地の南北の官道「下ツ道」と東西の官道「横大路」が交差する八木町、そして戦国時代に寺内町として成立した今井町の間を流れていきます。

今井町は、現在も大半の民家が江戸時代の姿を残しており、平成５年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。東西約600m、南北約310mの地区内には、約500棟の伝統的建造物が存在し、全国で最も多い地区となっています。

戦国時代に一向宗の門徒が寺を中心とした自治都市として武力を養い、周囲に環濠を巡らせた環濠集落を形成しましたが、織田信長に降伏。しかし、赦免の朱印状によって自治特権が認められると、その後、江戸時代には「大和の金は今井に七分」や「海の堺、陸の今井」と称され、独自の通貨である今井札（銀札）を発行するほどの商業都市として栄えました。



参考資料　奥飛鳥の歴史的風土、景観にふさわしい水辺の創出～「神奈備の郷・川づくり計画」の取り組み～『川の情報誌さらさ 2020 秋号』
日本遺産ポータルサイト／橿原市観光情報サイト／歴史街道パンフレット「ならかしはら今井町」

世界の水

水辺空間を生かした都市再生の事例
―ヨーロッパ：フランス・セーヌ川からの景観―

工学博士・元大阪産業大学教授
中野 雅弘（なかの まさひろ）



はじめに

ここしばらくはアジアの事例を紹介してきましたが、今回は久しぶりにヨーロッパの事例として、多くの観光客が訪れるフランスの首都パリをご紹介します。パリは歴史的な観点からフランス人が自ら「ヨーロッパの中心」や「花の都」と自負する都市ですが、そのパリでも有名なセーヌ川の景観についてです。

1．セーヌ川について

セーヌ川は、フランス北部にあるフランスの心臓部であるイル・ド・フランス地方を潤し、パリを貫流するフランスの代表的河川であります。全長は776kmでロワール川に次ぐフランス第二の川で、その流域面積78，650㎢は全国土の約7分の1を占めます。このセーヌ川はパリの地形や風景に大きな影響を与えており、南東方向からパリ市に入ったセーヌ川は、中心部をほぼ東から西へ流れ、南西で市外へ流れ出たのち南北に大きく蛇行します。中心部にはサン・ルイ島とシテ島の両川中島があり、シテ島はパリ発祥の地であります。市はセーヌ川を挟んで大きく右岸と左岸に分けられ、両岸と二つの川中島を結ぶ橋の数も多く、河岸は市民や観光客の散策地となっています。

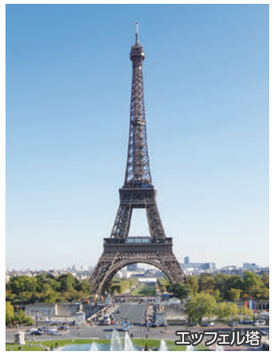


パリを横切るセーヌ川

2．セーヌ川からの景観

①世界遺産としてのセーヌ川岸

このセーヌ川は、1991年に河岸とその周辺の建造物がユネスコの世界遺産に登録されました。12世紀に建てられたノートルダム大聖堂をはじめ、19世紀のパリ万国博覧会のために作られたエッフェル塔やパリ発祥の地であるシテ島など、右岸と左岸に並ぶ由緒ある建造物がセーヌの悠久の流れを感じさせます。セーヌ川を途中何本かの橋をくぐりながら、上流へ進むと歴史を感じさせるいくつかの橋が目に留まります。あ


エッフェル塔

る橋は200年前のだとかで日本の橋を考えるとかなり建設時期は古いものが多いです。もっともそのエッフェル塔は、完成直後は「パリになじまない」と酷評されたようでありますが、今ではパリには無くてはならないものとなっています。

②セーヌ川からの景観

いくつかの橋をくぐり、船はルーブル美術館の横を通ります。このルーブル美術館は以前フランス国王の宮殿でありましたが、ルイ14世の時に宮殿はベルサイユに移されました。その後100年間は浮浪者の棲家となっていたことなど興味深い話があります。その後しばらくすると、船はパリの中心であるシテ島の近くに来ます。そこには200年間かけて作ったあの


シテ島のノートルダム大聖堂を望む

話は少し離れますが、2000年のミレニアムに関連して英国ロンドンのタワーブリッジも以前に見た時は薄黒かったのですが、ミレニアムを経た

有名なノートルダム大聖堂があり、その後ノートルダム大聖堂はフランス各地にも作られたようです。パリの大聖堂を20数年前の最初に見たときは、もっと薄黒く汚れていたような気がしましたが、西暦2000年のミレニアムを経て綺麗になりました。しかしご存じのように、2019年の火災で一部が焼失し再建中なのは残念な気がします。

2003年に見た時には明るい雰囲気に変わっていました。これは、ヨーロッパではミレニアムの時期に合わせて100年ごとに古い歴史的建造物をきれいに洗うことになっていることに関連がありそうです。英国ではこのミレニアムに合わせて、テムズ川にセントポール大聖堂とテート美術館（テート・モダン）を結ぶ「ミレニアムブリッジ」が建設されたくらいですので、ヨーロッパでは大きなイベントのようです。



セントポール大聖堂とテムズ川に架かるミレニアムブリッジ（英国）

③鉄道駅を改造したオルセー美術館

ルーブル美術館の対岸にあるオルセー美術館は以前鉄道の駅であり、それを改造した建物であることに驚きます。確かに内部はやけに縦長であったり小部屋があったりして変わった建物でありますが、このオルセー美術館は年間500万人が訪れるようで、収容している美術品の質も違うからでしょうが観光客の取り込みに様々な工夫をしているからかも知れません。また、美術館に改造したことなどは、古いものを大切にしながらも人々を驚かせようとするフラン人の発想を感じさせます。前述したエッフェル塔の建設などもその類かもしれません。


セーヌ川から見るオルセー美術館

3．パリの景観や眺望を守るフュゾー規制

このようなパリの景観はどのようにして作られ、守られてきたのでしょうか。詳細については別の機会にでも紹介しますが、ここでは景観での眺望を守る法制面での工夫としての「フュゾー規制」を簡単に触れます。この規制は歴史的なモニュメントや建造物の前方あるいは後方にふさわしくない建物が建てられることを規制するため施行されたものであり、最初に適用されたのはパリ市（1977年）であります。この規制では守る景観に対して、人々の視野に入り邪魔をする新しい高層建築などの制限や、手前に樹木などを植えて景観を良くすることなどが含まれているようです。このような考え方は市内各区の景観にも適用され、セーヌ河岸だけでなく他のコンコルド広場や凱旋門周辺の景観にも適用されています。パリ市は「花の都パリ」を将来に残していくための努力として、このような規制などでパリの景観を守っているようです。（参考として、京都と英国の例を示します）


セントポール大聖堂の眺望を確保するビルの隙間（英国）


京都疏水と東山の眺望（京都市条例）

さいごに

今回ご紹介したように、船から見るセーヌ河畔のパリのまちは落ち着いたたたずまいを見せています。その理由は電柱や電線がないとか看板を規制していることなどがありますが、建物の手前に自然な樹木などを植えて人々の視界から建物が直接目に触れることがないような細かい工夫などがあるようです。我が国の都市をこれらの景観と比較するとまだかなりの隔たりがありますが、元来日本人は山や川などの自然を受け入れる美意識があります。このような美意識は日本の四季折々の違いを感じながら育まれたように思います。

一方、年間の季節感が日々の寒暖の差程度しかない季節感に乏しいヨーロッパでは、フランス庭園にみられるように人工的に自然を取り入れた景観を作り出そうとすることが多いような気がします。さいわい日本は、自然の変化に富んだ環境に恵まれています。これからもそれらの恵まれた環境を生かしつつ、景観や眺望にも配慮して古い建物や町並みを残した調和のとれたまちづくりを続けてほしいものです。

水を訪ねて

水と大地がつなぐ地域のきずな 木津川上流
～河川と地質と暮らし～

名張川上流や宇陀川上流辺りの山々は火山活動による岩石でできています。以前は1500万年～1400万年前頃に、曽爾・室生周辺で激しい火山活動が起き、噴出した岩石・灰が散り積もり冷え固まったものが、室生火山群と考えられていました。しかし、最近の研究では、噴出源は室生周辺の火山ではなく、奈良県南部の吉野山地大峰・大台火砕岩の岩脈に由来するものと判明してきており、この岩脈の分布から、大台地域に世界的規模のカルデラ噴火があったと考えられています。室生火山群の流紋岩質溶結凝灰岩は、太古の昔、大台地域の巨大噴火に伴う火砕流が遠くまで流れ、広い地域に堆積したことを物語っています。この火山活動による噴出物は、この辺り一帯に豊かで清らかな水と美しい鉱物といった自然の恵みを与えています。

また、名張市の南西に位置する宇陀川支流大野川の上流、奈良県宇陀市室生向渕（むこうぶち）は、「宇陀郡地名起源考」によると『「向渕」に新向渕と古向渕あり。古向渕には竜王渕と称する沼あり。其渕と渕、向かい合える故、向渕の名を生ずるに至れり。此の地方は太古の火山地帯にして、其渕は当時の噴火口の遺跡なりという』とあり、地名にも室生に火山があったとされる名残が伝えられています。

このような紀伊半島の三重・奈良において太古の火山帯が生み出した自然の造形をたどりながら、歴史や人々の暮らしの中の水について訪ねてみました。



「はないかだ」と住民の想い ～はないかだの活動～

1989年に結成した「名張の川を守る会」と、その活動を引き継ぎ1994年に改称スタートした「川の会・名張」が、1990年から30年以上にわたり、名張市内の城下川（簗瀬水路）に、毎年、「はないかだ」を浮かべています。設置期間は毎年5月下旬から6月初旬の2週間程です。「筏」に乗せるハナショウブは苗から育てています。また、「名張地区まちづくり協議会」や「春を呼ぶ会」とコラボして、傍らに竹行灯（たけあんどん）の設置も同時に行っています。



「川の会・名張」の皆さんに、その活動についてお聞きすると、「川をきれいにしたいので、川に興味があり、川遊びが好きなこともあり、子供たちにも遊んでもらえる川にしたいと、水や環境問題を学び、講演会や河原での豚汁作りやカヌー教室などの活動を行ってきました。近年は若手の人たちの参加もあり、古老の皆の元気も出てきました。」とメンバーは笑顔でお話しされました。

この「はないかだ」を通じて、道行く人々や地域の人たちから、しぜんと川や景色の会話が生まれ、川を通じた活動がもっともっと広がればよいと思います。

街を流れる名張川



奈良県御杖村の三峰山に源を発し、三重県の名張市街地を取り囲むように蛇行して流れる名張川は、人々の生活に欠かせない川です。火砕流で形成された上流の山々から流れる湧き水は名水となり、川沿いには酒蔵や古い商家がならび、市内のひなびた風景は、しっとりとした潤いに満ちています。

（一社）近畿建設協会 水環境研究部門 顧問
京都大学 防災研究所 特任教授
和田桂子（わだけいこ）

屏風を立てたような珍しい形の 屏風岩



流紋岩質溶結凝灰岩の柱状節理「屏風岩」は、昭和9（1934）年12月に国の天然記念物に指定されています。

標高868mの屏風岩は、共に天然記念物に指定されている兜岩および鎧岩の南西に位置し、幅2kmにわたり高さ約200mの垂直の柱状節理が屏風のように連なる壮大な岩壁です。ふもとの屏風岩公苑からは、春は桜、夏は緑、秋は紅葉、冬は雪景色と四季を通じて素晴らしい眺めを楽しむことができます。

暮らしの中の湧き水



標高400m～450mに集落が点在する室生向渕には、個人宅や村の中に多くの井戸があります。

このような標高が高い場所に井戸があり不思議でしたが、高い位置に地下水脈があると思われます。これらの井戸水は、火山噴出物によって形成された地域一帯の地質・地層が生み出した貴重な水であり、狭く急な坂道が多いこの地区の人々の生活に密着し、洗い水や農業用水、防火用水として今も使われています。

井戸の湧き水は、清澄でとても冷たく、サワガニの姿もありました。ちょうどタオルを濡らしに家の外に出てこられた方から、自分たちの井戸を大切に管理し、使われているお話を伺えました。『昔は、お母ちゃんの井戸端会議』の場でもあったそうです。

大野寺と弥勒磨崖仏（みろくまがいぶつ）





大野寺は役行者が開き、天長元年（824）弘法大師によって室生寺の西の大門として堂宇が建立されたと伝えられます。本尊弥勒菩薩を安置して、慈尊院弥勒寺と称し、その後、地名を名づけて「大野寺」と称したといわれています。

大野寺から宇陀川を隔てた対岸の切り立った岩壁には、弥勒磨崖仏（大野寺）が線刻され、国の史跡に指定されています。磨崖仏の岩壁は石英安山岩の露出したもので、高さ約33mの岩壁（弥勒巌）に、光背として高さ13.8mの挙身光式の凹みを切り込み、その内面を水磨きして弥勒仏の立像が線刻され、左下の岩面には密教曼荼羅が彫刻されています。

ガーネットを探そう！



室生地域は火砕流が堆積した地層で、火成岩をつくる鉱物（造岩鉱物）を見つけることができます。河川の上流の地層が侵食され、運ばれた礫や砂が河床や河原に堆積しています。ガーネットのほか、石英や雲母のカケラも発見できました。陽に照らされ輝く無数の鉱石の美しさは格別です。
河原の探索はとても楽しいひとときでした。



参考資料 向渕地区まちづくり協議会（2021年3月）
室生団体研究グループ（2008）：室生火砕流堆積物の給源火山, 地球科学

謝 辞
【川の会・名張】代表 福廣勝介 氏、事務局長 竹尾敬三 氏、川上聰 氏 【木津川上流管内河川レンジャー】本庄眞 氏
【同志社国際中学校・高等学校 非常勤講師】上村剛史 氏 【向渕の方々】
取材にご協力下さりありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

京都の水文化（その10）

木津川の「縦の水運」、「横の水運」～集落や人をつなぐ価値～

京都産業大学 現代社会学部 教授 鈴木 康久（すずき みちひさ）

京都の山城地域を流れる「木津川」は、古くから人々と共にある河川といえよう。『古事記』（下つ巻）に、「つぎねふや 山代河を 川上り 我が上れば 川の傍に 生ひ立てる（略）」とあり、仁徳天皇の皇后が詠まれた歌が記されている。皇后が山代川、今の木津川に来られていることからもわかるように、木津川は難波や奈良に都があった時代から重要な河川であった。本号では、木津川の水運について考えてみたい。

水運がテーマとなると、気になるのが「木津川」の名称である。名が示すように、木が集まる津（湊）があったと推察できる。地名の木津の地は、行基（668－749年）が架橋したと伝わる泉橋で知られ、平城京に最も近い場所にあたる。この地は8世紀の頃より泉木津と呼ばれており、濱に荷揚げされた多くの木材が平城京へと運ばれていた。

河川の名称は時代と場所で異なる。木津川がどのように呼ばれていたのかを知りたくなり、江戸期の地誌を手にしてみた。山城にかかる枕詞が書名となっている『菟芸泥赴（つぎねふ）』（第八）（1684年）に「山城河 山城の國の河をなべていふべきながら筒城にてよせあれば如此 日本紀十一日皇后不還猶行之至山背川而歌曰」とある（『日本紀』とは『日本書紀』のこと）。他に「泉河 木津河の少河上なりもと名輪韓（わから）又挑川（つぎね）といひし」とあり、木津川については「木津川 泉河の末也今きつね川といふ所也にはこづがわとよめり」とある。これらの記述から河川全体を山城川、上流が泉川、下流が木津川と呼ばれていたことがわかる。泉川の名称の変遷についての記述もあり、「輪韓河」は、武埴安彦（たけはにやすひこ）が川を挟んで天皇（崇神天皇）に挑んだので「挑川」へと名が変わり、それが訛って「泉川」となったとある。

『古事記』の記述にある「山代川」と『日本書紀（日本紀）』にある「山背川」は同じ意であり、その後の平安遷都で山背国が山城国に代わった際に「山城川」と呼ばれるようになったとされる。これらの河川名からも、「木津川」と平城京の関係や地域の歴史を知ることができる。この歴史を舟運から紐解いてみたい。



木津川・帆掛船（絵葉書：明治40年～大正7年）

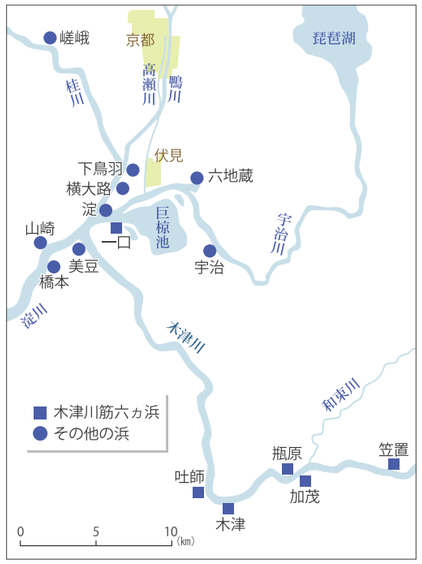
水運について調べると、『万葉集』（巻第一50）の「藤原宮の役人の作る歌」（長歌）に、淡海の国の田上山の檜が八十氏河（宇治川）に玉藻のように浮かべ流され、筏で泉の河（木津川）を遡り、大君の思いのまま用材が大和へと運ばれる様子を称える内容が詠まれている。瀬田川を木材が下り、巨椋池を経由して木津の濱から藤原宮へと運ばれており、木津が重要な湊であったことがわかる。

湊が中世において重視されていたことを、貴族や寺院の荘園を中心にした関所についての文書から知ることができる。興福寺大乗院の門跡経覚（1395－1473）が記した日記『経覚私要妙』に、淀川には616ヶ所もの関所（河関）があったとある。当時の河川の関所は湊の使用料を徴取するために設置されており、パナマ運河のように河川を往来する全ての船から徴取するものではなかった。当時の関所が重要な収入源であったことがわかる文書がある。『春日神木御入洛見聞略記』の宝徳3（1451）年の条に、興福寺は各地に荘園があるが知行できないため、関の通行料で社寺造営料をまかなっているとある。興福寺の荘園であった木津の様子については、徳満悠氏の研究が詳しい。論文では『雑事記』（1488年）に記述のある、興福寺から給田を与えられていた木守が30人おり、浜での荷物の陸揚げなどに従事している湊の様子や、長禄4（1460）年に船2艘で淀に板を運ぶや、長享3（1489）年に西南院の松を京都へと船で運搬している などの文書の紹介があり、木津の湊が賑わっていたことがわかる。



木津川下り（絵葉書：大正7年～昭和8年）

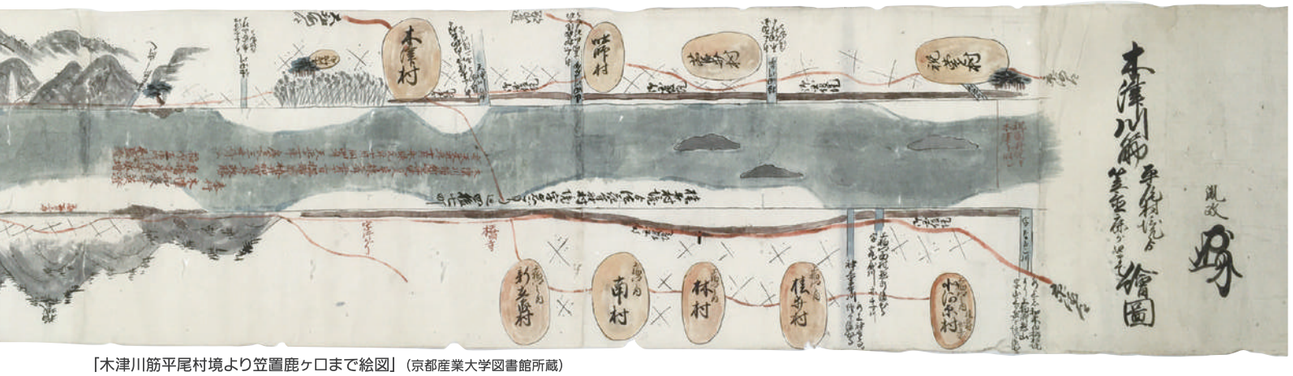
このような荘園等の関所が中心であった水運形態を変えたのが豊臣秀吉である。為政者となった秀吉は、慶長3（1598）年に淀の住民である河村与三右衛門と木村宗右衛門に、淀川での舟運に関する独占権（川船支配方）を与えた（河村与三右衛門が亡くなった後、1615年に河村家から戦功のあった角倉与一へと権限が移行する）。この仕組みを徳川家康も引き継ぎ、慶長8（1603）年の朱印状「淀川旧例之覚」に、「大坂・てんほう・尼崎・山城川・伏見上下仕る過書船、御公用として年中ニ銀子弐百枚運上致すべき事」とある。正徳4（1714）年の「淀川旧例之覚」には、「淀船ハ往古より淀の川船と申し候て、木津川ハ笠置まで、宇治川ハ宇治山の内まで、桂川ハ嵯峨まで（略）」とあり、笠置まで舟運する権利を有していたことがわかる。



木津川筋六ヵ浜とその他の浜（『加茂町史』より）

淀川の川船（過書船）の艘数は、元和元（1615）年に162株（一株一艘）であったが、その翌年に艘数は両奉行（木村・角倉過書奉行）の判断で決めることができることとなり、1681年には二十石以下の淀上荷船は453艘であった。無論、これらの船は木津川だけでなく、宇治川、桂川、淀川を往来していた。

一方で、木津川から運び出す荷物を扱うことが許された上荷船も就航していた。木津川沿岸で6つの浜の住民だけが上荷船を持つことができる一株一艘の株制度が始まり、木津川全体での株数は78株であった。6つの浜の株数は笠置17、加茂郷6、瓶原郷6、木津郷22、吐師村9、一口村18と、木津郷が最も多くの22艘の上荷船を運行していた。この株制度は、明治2（1869）年まで続くこととなる。明治2年に京都府が



「木津川筋平尾村境より笠置鹿ヶ口まで絵図」（京都産業大学図書館所蔵）

実際の船舶数を調査した結果は、笠置が株の３倍にあたる51艘、加茂も瓶原郷も同様に３倍の18艘を運行しているのに対して、木津郷、吐師村、一口村は株数と同じ艘数が運行している。６つの浜での株数と艘数の関係は複雑で、地頭用船支などの理由から一株で二艘から三艘を持つことができる権利を得たり、株の借受を行うことで水運の需要に対応してきた。これらの内容は『加茂町史』（第二巻）などに詳しい。いずれにしても積荷の有無が艘数につながっており、木津川上流に位置する上野などから運ばれて来る荷や、和束川の上流にあたる和束や信楽からの荷が影響していると思われる。木津川沿岸の地域にとって重要な産業である舟運が明治以降も続いている。

木津川筋六ヵ浜の船数の変化

浜名	株数	上荷船数			
		成立時（年代不詳）	安永5年（1776年）	寛政12年（1800年）	明治2年（1869年）
笠　置	17	17	34	51	51
加茂郷	6	6	12	18	18
瓶原郷	6（18）	6	12	18	18
木津郷	22	22	22	42	22
吐師村	9	9	18	24	9
一口村	18（12）	18	36	23	12
6　浜	78	78	134	176	130

※株数の（　）は、明治2（1869）年の株数を示す。

河川の水運は、縦だけでなく横もある。時代劇の撮影で知られる「上津屋橋（流れ橋）」は、昭和28（1953）年まで渡し船が使われていた。『八幡市誌』（1980年）によると、渡し船は2艘で木津川東岸佐山村の「樋の口」と上津村「あんこひ」（安居樋か）の間を運行していた。文化10（1813）年の船の大きさは長さ６間２尺５寸（11・7ｍ）、幅６尺（1・8ｍ）であった。船頭はくじ引きで３人ないし４人を定め、２年から５年の間を勤め、庄屋に運上金を納めている。その額は寛政４（1792）年から天保元（1830）年までが500文、弘化５（1848）年から嘉永５（1852）年までが一貫文であった。勤めは朝六ツ（午前６時）から暮六ツ（午後６時）までで、弁当を持参すること、休息のために舟場を引きあげてはいけないなどの決まりがあった。このような決め事は、それぞれの渡し船ごとに異なっている。



流れ橋「上津屋橋」

木津川の渡し船について各市町村が編纂した市史等を調べたが、それぞれに濃淡があり俯瞰しての記述は難しい。そこで、現代の木津川に関する様々な事項について村井博氏がまとめた『秘められた木津川の歴史物語』（1994年）に頼ると、「樺井の渡（水主の渡し）」から「岩田の渡し」まで23ヶ所の渡し船について、伝承や集落名、存続の年月などの記載がある。

江戸期の視覚資料としては、京都産業大学図書館所蔵の「木津川筋平尾村境より笠置鹿ヶ口まで絵図」に、木津川の平尾村から笠置までの渡し船の場所について描かれている。木津の渡し船の箇所には「木津川筋新造舟完叟享禄三年五月十三日探題職椿井加賀守正勝　亦天文九年十月　永禄元年十月同四年　天正十一年　慶長三年八月至　奉行　木津和泉守英澄（略）」との椿井家に関する記述が見られる。椿井文書は偽文書が多いことから、その引用には注意を要する。そこで『椿井文書―日本最大級の偽文書』（2020年）の著者である馬部隆弘氏（現在、中京大学教授）に見ていただいた。余談であるが、椿井政隆（1770―1837）の花押が入った絵図が珍しい事などから、本絵図は大阪大谷大学博物館の特別展（期間：令和５年４月３日～６月19日）で展示されていた。その際に、「椿井家は戦国期以前に木津川での渡し船の管理を任されていた」、「絵図や文書は、真実の部分に依頼者の求めに応じて加筆しているので、全ての情報が偽りというわけではない」と教えていただいた。この点を踏まえ、絵図の信びょう性を高めるためには、渡し船の場所について間違った情報を伝える必要のないことから、絵図は1800年頃の渡し船の場所を伝えているのではないかと考える。本絵図には、木津川市の平尾村（棚倉村）から上流部の笠置までの間において上流から笠置、五軒屋、銭司、瓶原、西村、木津、祝園（平尾）の７ヶ所の渡し船が描かれている。

当時の文書である「石井家文書」をみると、安永５（1776）年の角倉・木村役所に報告した覚では、木津川の渡し船は、上流から五軒屋（笠置町）、銭司、加茂、瓶原、木津（木津町）、平尾・薮（山城町）、飯岡・草内（綴喜郡田辺町）、富野、水主、上津屋（城陽市）、府子（封戸、久世郡久御山町）とあり、十三ヶ所であった。これらの渡し船のうち、五軒屋・加茂・木津・薮の４ヶ所は街道の一部であり「往来人を渡し申し候」となる浜であった。その他の９ヶ所は「百姓野通ひ船」の発着場であった（『加茂町史』より）。それぞれの時代において、渡し船の場所や役割は異なり、詳細を知るには文書等による丁寧な調査が必要となる。



笠置の渡し船（絵葉書：明治40年～大正７年）

現在、これらの「横の水運」である渡し船のルートは、それぞれの地域において重要な場所に位置しており、木津橋のように橋梁が架けられている場合が多い。一方で「縦の水運」は、時代の求めに応じて形態が変化し、今の木津川で見ることできるのはカヌーだけとなっている。河川は市町村界であることが多く、地域の関係を水の流れで分断してきた。その一方で水運によって、遠方の地域と地域、集落と集落をつなぎ、人と人の関係をつくってきた。2025年の大阪万博において、八軒家浜から伏見までの舟運が復活することとなる。これまで述べてきた「縦の水運」と「横の水運」が、どのように地域の社会構造を創り、文化を育ててきたのかを問い直し、新たな形態の舟運を生み出す時ではないだろうか。

染織の故地を訪ねて

評論家・文化プロデューサー
河内厚郎



西宮の染殿池

「吾妹子に猪名野は見せつ　名次山角の松原　いつか示さむ」〈わが妻に猪名野は見せた（風光明媚な）名次山や角の松原はいつになったら見せられるだろう〉

万葉集の高市連黒人の歌にいう角（都努）の松原は、白砂青松の海岸で、入り込んだ入江が天然の良港「務古水門」（「務古」は現在の武庫）になっていた。



染殿池（喜多向稲荷神社）



染殿池周辺の地名

4世紀後半～5世紀、朝廷は先進の技術を摂り入れようとして大陸と交流を重ねていた。西宮市松原町の「染殿池」は、わが国に染織の技術が伝わった地。中国大陸から渡来した織り姫（漢織、呉織）ゆかりの津門綾羽町・津門呉羽町という町名が周辺に残る。

日本書紀をひもとくと、応神天皇の招聘で渡来した技術者は「武庫の水門に着き、池田の里に至る」と記されている。大陸に渡った阿知使主（猪名津彦命ともいわれ、家系伝説では後漢の霊帝の子孫となっている）に連れられて日本に来た工女は、兄媛・弟媛・呉織・漢織と呼ばれる4人。兄媛は胸形明神の要請により九州・筑紫潟の地にとどまり、そのほかの工女たちは務古水門に到着。そのとき船を繋いだ松を「漢織呉織の松」といい、故国をしのんだ樹の下で、池の清水を汲み、糸を染め機を織ったことから、この池を染殿池と呼ぶようになった―この言い伝えは「染殿町」「津門綾羽町」「津門呉羽町」などの地名となって今に伝わる。



史蹟 漢織呉織松 染殿池の碑（喜多向稲荷神社）

池の北側にある喜多向稲荷神社は、いつ頃から祀られているのかわからないが、漢織と呉織を懐古する地域の人々が、その遺徳をしのんで祭祀を始めたのがルーツと考えられている。（筆者は染殿池の西隣、津門仁辺町に居住する）

大辞林によると、呉服は「中国・呉の国から日本に伝わった織り方によって作った織物。くれはとり」とある。古語大辞典（小学館）には、「はとり」が「はたおり」を略した語とあり、呉の国から来日した当初は「くれのはたおり」などと呼ばれて、「くれはとり」と略称されていた。彼女たちの伝えた織物が「呉服」として定着、読み方も現在の「ごふく」になったのであろうか。



呉服神社

池田の呉服神社

中国から来た織り姫、呉織・穴織（漢織の別表記）が絹織物を始めたという伝承が池田市にある。

阪急池田駅からほど近い呉服神社の縁起には「日本最初の繊維の祖神」とあり、呉織が昼夜織り続けたことで機織裁縫染色の技術がわが国に伝わり、男女寒暑服装の別が定まったという（が、日本書記に池田の地名は見当たらない。研究者は、伝承は後世につくられたと考えている）。

池田市内には、呉織と穴織が到着したと伝わる猪名川ほとりの「唐船が淵」、糸を染めた「染殿井」という井戸、星明りに照らされて機を織った「星の宮」、布を干した「衣掛けの松」を示す碑がある。



唐船が淵の碑

織り姫たちが亡くなると姫室や梅室という塚に葬られ、呉織は呉服神社に、穴織は伊居太神社にまつられたとし、現在の町名にも「呉服町」「姫室町」「綾羽」などが見える。染殿井は池田市の市章のモチーフになり、市の観光大使は「いけだ織姫姉妹」として活動、池田商工会議所は織り姫が登場するアニメや漫画をつくってキャンペーンソングも出した。

海沿いの西宮・津門から内陸部の池田へ来る道中、糸を編みながら移動したことで、「糸編み」→「伊丹」という地名になったという面白い言い伝えもある。

芸能ゆかりの史跡

池田も西宮も伝承地として広まるもとになったのは、室町時代の謡曲『呉服』のせいだと考えられる。「摂津・呉服の里」を舞台に呉織・穴織が登場して織物を献上するという曲を繰り返し演じるうち、織物が伝わった地として定着していったのではなかろうか。江戸時代の観光ガイド『摂津名所図会』では、池田を「呉服の里」とし、織り姫をめぐる史跡を紹介している。

池田市西本町。呉服橋の南、猪名川の堤に沿って、〈呉服座〉という芝居小屋があった。江戸時代以降、池田の西の入り口という意味でそこは「西之口」といわれ、箕面の勝尾寺と宝塚の中山寺を結ぶ「巡礼道」と大阪と能勢を結ぶ「能勢街道」が交差する場所にあった。明治6年の地租改正の際に制作さ



大衆演劇場『池田呉服座』



呉服座跡地の碑と呉服橋

れた『池田村絵図』ではまだ呉服座を確認できないが、明治20年頃の「西之口戎座」と書かれた入場割引券が発見されており、戎座が呉服座の前身ではないかといわれている。昭和44年の呉服座移築調査の際、棟束の筋違に打ち付けられていた長さ約２ｍの幣束が発見され、「上棟明治25年８月10日建」の記載のあることが判明した。この頃から呉服座は「くれはざ」と呼ばれるようになったらしい。

　呉服座では巡業の歌舞伎をはじめ落語・講談などが催されていたが、映画やテレビの台頭にともなって衰退。昭和44年５月の興行を最後に閉館したあと解体されて、昭和46年に愛知県の明治村で復元、公開された。昭和59年には江戸時代の芝居小屋の建築様式を残す数少ない建築物として国の重要文化財に指定されている。地元では、江戸時代に建てられた呉服座の建築様式により、以前あった池田中央シネマの場所に池田呉服座として一部再現された。

染殿寄席

　西宮には戦前、えべっさん（西宮神社）の門前に芝居小屋「三浦座」や寄席の「花月」などがあったが、昭和30年代に入ると古くからの興行街は廃れていった。

　そこで、「染」の字の芸名が入った落語家（林家染丸一門）を中心にして昭和60年（１９８５）から始まったのが「染殿寄席」である。染殿池の傍にある公立ホールで、歌舞伎に題材をとった芝居噺を得意とする染丸（当時は襲名前で染二といった）・染語楼（当時は市染）・染二（当時は染吉）・染雀・染左・・・といった面々で続けられた。ゆくゆくは市川染五郎（現・松本幸四郎）も呼んでみたいと構想をふくらませていたら、近くの朝日新聞阪神支局で赤報隊事件と呼ばれるテロが起こり記者は死亡（昭和62年）、イベントの自粛ムードが広がるなか、休止状態となった。

　それが造り酒屋の白鷹禄水苑で復活されることになったものの、染丸の脳梗塞で中断（２０１２年）していたのが、兵庫県立芸術文化センターで10年ぶりに復活することになった（令和４年９月10日）。

　染丸一門からは林家染二と林家花丸、月亭文都、露の五郎兵衛門下の女流落語家で尼崎に天台宗の寺（道心寺）をひらいた（僧侶でもある）露の団姫が出演、人形浄瑠璃発祥の地・西宮に因んで乙女文楽（女性がひとりで人形を遣う）の吉田光華が花を添えた。トーク

には、能楽や文楽、女流義太夫など古典芸能のメセナ的役割を果たしてきた、白鷹の副社長、辰馬朱満子氏が加わった。

　灘五郷のうち西宮郷と今津郷が合併して西宮市となった。今津郷には大関酒造、西宮郷には日本盛や白鹿・白鷹などがあり、それぞれが古い港を持ち（大関酒造の灯台は日本最古の木造灯台）今はどちらもマリーナになっている。今津郷から西宮郷の北側は津門と呼ばれ、高田郁の小説『あきない世傳』は享保16年（１７３１）の武庫郡津門村から物語がはじまる。

　令和７年に西宮市は市制百周年を迎える。日本染織文化のルーツ・染殿池の故事来歴を活かし、カラフルなファッションショーなどを開催してみてはどうだろう。

近江八幡の、日蝕ゆかりの能

　玉岡かおる『負けんとき　ヴォーリズ満喜子の種まく日々』は、明治半ば、播州小野藩の最後の藩主の娘としてうまれた一柳満喜子が



『負けんとき ヴォーリズ満喜子の種まく日々』

主人公である。華族ながら平民の通う女学校に進んで、アメリカ人教師から英語やキリスト教の精神、神戸女学院では音楽を学んでアメリカに留学した満喜子は、運命に翻弄されながらもみずからの人生を切り拓いていく。

　夫となったのは、キリスト教伝道のためアメリカから来日したW・メレル・ヴォーリズ。関西学院・神戸女学院・大同生命本社ビル・心斎橋大丸・同志社大学アーモスト館などを手がけた建築家でもあり、またメンソレータムで有名な近江兄弟社を興して、青い目の近江商人という異名をとった。

　ふたりは近江八幡に本拠を構え、イエス・キリストが伝道したガリラヤ湖から命名した「ガリラヤ丸」に乗って琵琶湖沿岸を回り、布教を広めていった。

　幼児教育に邁進する妻と、日本に帰化し改名した夫（一柳米来留、「米国より来りて留まる」の意）は、前途に立ちはだかる、幾多の苦難を乗り越えていく。

　この小説に、明治33年に日牟禮八幡宮の能舞台が改築された際、竣工祝いに奉納された創作能『日觸詣』のことが出てくる。

「輝く太陽が、白昼、にわかに翳って光を奪われ、萎えてかき消え、二つの輪になる」

　４世紀頃、近江八幡の地で、のちに応神天皇となる誉田別尊が、ふたつの日輪を見たという縁起から書き起こされているが、これは金環食、ダイアモンドリングのことであろう。その能が、昭和になって、40年ぶりに湖国で上演されたのである。


能舞台（日牟禮八幡宮）

　宇佐八幡の神職が霊夢を告げられ、江州日觸の宮で美しい二人の女に出会う。二人は応神天皇の御世に、大陸の国から海を越えて渡来した工女、呉織と漢織の霊だった。彼女たちは宮のいわれを語り、応神天皇行幸のいにしえのできごとを称えて建てた八幡宮の名とともに、今日まで栄えてきたという。女たちは、古代の人々の聡明さや高徳を称えつつ、夕暮れの花の陰に消えていく―

みんなの水辺

「おかん」が主役になる川との関わり
～身近な河川へ日常的に楽しくかかわるプロジェクトの紹介～

結creation　北村美香（きたむら　みか）

皆さんは、川で過ごす時間はどれくらいありますか？旅先で川が流れる風光明媚な景色に心が洗われたような気持ちになったこと。バーベキューやキャンプで出かけたことがある方もいらっしゃるでしょう。私が勤務する博物館でも、夏になると近隣の河川に入り生き物観察会を毎年実施し、河川の面白さや生き物の多様性を伝える活動をしてきました。しかし、誰もが川を楽しめない状況もありました。特に付き添いで来られているお母さんにとっては、川に入ることは難しい状況があることに気が付きました。そんな気づきから、この活動は始まりました。

1　プロジェクトのはじまり

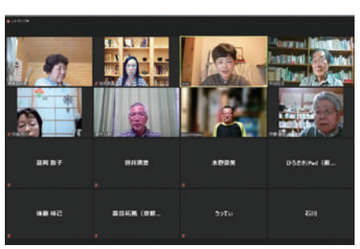
ある時、観察会の講師として子どもたちに魚の採り方などを話しながらふと岸に目をやると、参加者のお母さんたちが荷物の側で小学生にも満たない小さな子どもたちと一緒に観察会を眺めている姿が見えました。その後改めて参加者の様子を観察してみると、河川に入って参加しているの大人は、お父さんがほとんどです。子どもたちは小学生以上で、お母さんや小さな子どもたちは一緒に来ているものの、岸で待っているというのがよくある状況だというのが分かりました。岸で待つお母さんたちに「川遊びは苦手ですか？」とお聞きしたところ、「私も入って一緒に魚を採ってみたいけど…下の子は小さいし、荷物もあるので諦めてます。」とのことでした。博物館も河川や生き物に関心を持ってもらいたいと事業を実施してきましたが、河川での観察会は小さな子どもには危険だという意識から、男性や小学生以上が中心となりがちで、お母さんや小さな子どもたちにとってはハードルが高いことに気づいていなかったことを実感しました。


河川での観察会実施風景【高槻市立自然博物館 撮影】

私たち結creationは、みんなで楽しみながら、河川をはじめとする身近な環境や地域に興味を持ってもらうきっかけづくりを目指して活動しています。河川に来ていながら我慢をしているお母さんたちの「やってみたい」気持ちを知り、何かできることはないかとの思いから始まったのが本プロジェクトです。これまで河川での活動であまり注目されてこなかったお母さんと小さな子どもに焦点を当て、日常の生活の中で河川と関わるきっかけづくりをすることをねらいとしました。子どもたちは、幼少期から自然体験を重ねることで、子どもの総合的な生きる力を育めると言われています。そこで、お母さんが、通園や通学、買い物や散歩の途中などの日常の暮らしの中で、自分たちだけでも気軽に河川に関わろうと思う動機につなげることが出来ないかと考えました。

2　まずは研修・ミーティングでスキルアップ

これから屋外での活動を進めるにあたり、活動の計画を立てるのと同時に、緊急対応等についても私たちが改めて学ぶ機会が必要なのではないかと考えました。そこで、日本自然保護協会さんに相談したところ、近畿地区で活動されている同協会の大阪連絡会さんをご紹介いただきました。この活動の趣旨をお伝えしたところ、小さな子どもたちを主な対象として活動されている方や、河川での活動を中心にされている方などからお話を聞く研修の機会を得ることが出来ました。当時はコロナ禍で対面での集まりが難しい状況であったため、リモート開催となってしまったことが残念ではありましたが、子どもたちの行動の特徴や、興味関心を引き出せる声かけの方法、注意事項などについて、現役の自然観察指導員の皆さんから事例をふまえたお話を伺うことができたのは大きな収穫だったと感じています。


リモートでの研修会

3　「おかんのための観察会」実施

次に、小さな子どもを持つお母さんたちを対象に、地域を流れる身近な水路や河川を自分が気軽に楽しむことを目的とした観察会「おかんのための観察会」を、大津市上田上地区のオランダ堰堤前で開催しました。普段は川に入らず、荷物や小さな子どもの面倒を見るにとどまっているだけの「おかん」たちが楽しく関われる機会を作りました。お母さんたちに思う存分河川を楽しんでもらおうというのがこの観察会の一番のねらいです。

まずは参加者の意見を事前に聞き、「やってみたいこと」を実現させる内容を参加者と共に企画しました。当日の講師は、地域で生物調査や環境学習の講師などで活動している地元大学の女子学生にお願いし、気軽なコミュニケーションの場としても位置づけました。日常の生活の中で、特別に時間を設けなくても日々身近な河川に親しむには、どのような取り組みが必要か。そのきっかけや活動、相談する仲間を増すことができればと思っていましたが、初対面とは思えないほど皆さん仲良くなり、予定時間を二時間も超過する盛り上がりでした。「川だけでなく、その周辺も含めての視点から見ることが必要ですね。」と、参加者から言葉が出たのが印象に残っています。皆さん連絡先を交換し、今も交流は続いているそうです。


「おかん」が主役の観察会風景



4　これからの活動

手探りで始めた活動ですが、地域の方や河川で活動している団体や個人の方、河川管理者の方の多大なるご協力をいただいて少しずつ実現することができました。また、子どもたちと普段どのように過ごされているか、子どもたちにどんな経験をさせてやりたいと思っているかなど、多くのご意見を寄せて下さった参加者の皆さんには本当に感謝しかありません。観察会に参加された皆さんから、これからも継続的にこの活動を開催してほしいと何度も要望をいただいています。観察会に参加したお母さんたちが自分たちの子どもや、地域の子どもたちに次は伝える側となっていきたいと発言して下さったことは、この活動の一番の成果です。お母さんが進んで河川と関わることで、子どもたちは小さなころから当たり前に河川と関わり、経験を重ねることができます。河川とともに発展するまちづくりに向けて取り組める人材育成に寄与することを、私たちなりに考え、今後も継続させて活動していきます。

水都大阪と幻の大阪大国技館（19）

水都の会 城北川プロジェクト（代表　藤井（ふじい）　薫（かおる））

飛行機発着場の謎

「本建築の最も特異とするところは、同屋上を飛行機発着場とすることで、これは最近とみに重大化した航空事業の将来に鑑み、大都会の中心部にこれが発着場の必要を認めたもので我国としては最初の設備で・・」

建築雑誌「工事画報5月号」掲載の近々大阪で着工予定の建物の記事です。



建築雑誌『工事画報』
【出典：大阪府立中之島図書館】

「なんだ、今話題の『空飛ぶクルマ』の話か！確か万博に向け、市内のビルの屋上に発着場を造るとか新聞に出ていたな。」でも「これが発着場の必要を認めた」なんて妙に時代がかった表現です。

不審に思われたのも当然。実はこの「工事画報」発刊は90年も前の昭和9年で「本建築」とは、本稿で紹介してきた旭区関目（現城東区古市）にあった「大阪大国技館」（以下、「国技館」という）ですから驚きです。

不審な点は他にも。

①国技館を貸すのは実際に借りた「大日本相撲協会」ではなく「関西相撲協会」

②総工費も8百万円と実際の8倍。

③約2年余とあった工期は、実際には1年足らずと実際と大きく異なっています。


大阪大国技館

完璧なフェイクニュースの様ですが、雑誌の発刊日は昭和9年5月で確かに国技館建設発表時期と同じです。

「確か関目の国技館は昭和10年5月に詐欺だと風評が立ち計画中止になり、後で仕切り直して建てたはず。」計画中止前後で全く別な計画となったのなら一定理解は可能ですが、無論、発着場なんてありえません！

エンパイア・ステートビルの謎

ここで、ある写真を目にしてハッとしました。エンパイア・ステートビルに飛行船が着陸したような写真です。


建設中のエンパイア・ステートビル
近くのツェッペリン号
【出典：ウィキペディア】

同ビルは、昭和6年ニューヨークに竣工した当時世界一高いビルでした。

驚いて当時の新聞等を見ると、ビルの103階には飛行船発着場が設けられていたというではありませんか！

高層ビル最上階から空の旅に出るという夢のような光景は20世紀初期には現実のものだったのでしょうか？

実は発着場の高さは400m以上。強風でドッキングは相当困難でした。昭和6年にGYBコロンビア号等の飛行船が成功しますが、接続は僅か3分程で実用化には至りませんでした。

工事画報の発刊はアメリカで実際に発着場が整備された約3年後です。記事が頓挫した国技館の計画であり、飛行機ではなく飛行船の発着場なら、一概に誤りとは言えないと思います。

しかし、完成できなかったとはいえ、何故日本初の飛行船の発着場が帝都東京ではなく、大阪のしかも、関目の国技館に計画されたのでしょう？

ツェッペリン号と日本の航空産業

かつて飛行船の代名詞ともなったドイツのツェッペリン伯爵号は、全長235mの巨大飛行船で、昭和4年世界1周に出発。8月19～23日には日本の茨城県霞ヶ浦に寄港します。当時この世界最大の飛行船に30万人を超える見物人が殺到しました。


朝日新聞夕刊（昭和6年4月21日）

ツェッペリン社の飛行船の訪問は当時の日本人に熱狂的に迎えられましたが、実は同社の飛行船は、その前に日本の航空産業の興隆にも大きな影響をもたらしていました。

話は第1次世界大戦中の大正5年に遡ります。ドーバー海峡で撃墜されたドイツ軍のツェッペリン号のかけらを留学中の石川登喜治氏が拾って大阪の安治川の住友伸銅所（後の住友金属）に持ち帰ったのが日本のジュラルミン研究開発の始まりでした。


ツェッペリン号
【出典：国立国会図書館アーカイブ】

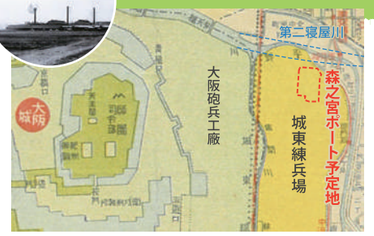
しかし、あえなく失敗！大戦後、日本政府は航空機には欠かせぬ重要素材として、製造技術習得団をドイツに派遣。戦利品としてツェッペリン号も手に入れ、大正8年漸くジュラルミンの製造に成功し、国産飛行機・飛行船の本格開発も始まります。

大正10年4月には日本でも航空法が制定。本格的な航空時代へ入り、大正12年には航空機による東京大阪間の定期路線も開始されます。

「飛行大会のメッカ」城東練兵場

国技館があった城東区には、かつて城東練兵場があり、明治44年3月アメリカのボールドウィン飛行団による関西初飛行の舞台となりました。その後、同年4月には非公認ながら森田新蔵が国産単葉機で日本初の試験飛行に成功。大正5年1月には希代の興行師だった大阪相撲の第12代朝日山の斡旋でチャールス・ナイルスが宙返り飛行を、同年3月にもアート・スミスが日本初の夜間宙返り飛行を披露し、同練兵場は大阪の「飛行大会のメッカ」となります。


城東練兵場
【出典：ジャパンアーカイブ】



大国技館と飛行船発着場

昭和5年5月ツェッペリン伯爵号は大西洋を横断し、南米への周遊にも成功。昭和8年10月シカゴ万博に登場するなどアメリカ合衆国から南米に至る初の飛行船航路を開設します。

この結果、ご紹介したようにニューヨークでもツェッペリン号の停泊を想定し、エンパイア・ステートビルに発着場が設けられるなど、現在の「空飛ぶクルマ」フィーバーの様な世界的な飛行船ブームが起こります。

このような中、大阪でも「飛行大会のメッカ」城東練兵場に程近い国技館に、飛行船発着場を造ろうとする機運が生じたのかもしれません。

しかし、良い時は続きません。昭和12年5月、ヒンデンブルク号の火災・墜落事故以降、各国は飛行船の安全性に危惧を抱き、時代は完全に飛行船から飛行機に移っていきます。

大阪関西万博と「空飛ぶクルマ」

地上の混雑に悩まされることなく、大都市の都心から直接空の旅に出るという、エンパイア・ステートビルで描かれた夢は、21世紀になり初めて大阪関西万博を舞台に飛行船ではなく「空飛ぶクルマ」の実用化により実現しようとしています。

大阪府・市は現在、万博での商用運航をめざし、府内で実証実験を推進中で、今年3月には離発着ボートとして桜島USJ南側地区、大阪港中央突堤、大阪城東部の森之宮を指定。民間ビルの屋上等、ボートの追加も見込まれています。


大阪城公園での実証飛行【提供：丸紅株式会社】

ただ、USJや大阪港などボートが臨海部に集中してしまうと、いくら安全面や騒音などがクリアしやすく、3分で会場に飛べても都心からの移動時間がかかり効果半減です。

水都大阪と「空飛ぶクルマ」

ここで本稿お約束の「水都大阪」の登場です。電動の「空飛ぶクルマ」はヘリコプターほどではなくとも騒音もあり、安全基準の確立のみならず、新技術に必要な住民への安心感の醸成には時間が必要と思われます。

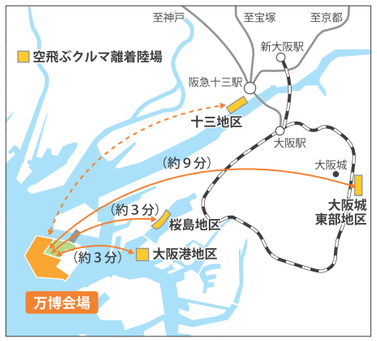
しかし、縦横に水路が巡る水都大阪なら、その強みを生かし、内陸部でも川沿いのボートから河川上空を飛び、人口密集地でも安全かつ環境にも優しい飛行が可能になります。

その良い例が第二寝屋川沿いの大阪城東部の森之宮ボートです。川沿いに万博会場まで飛ぶことができるこの場所が、奇しくもかつての「飛行大会のメッカ」城東練兵場跡地というのも土地の持つDNAを感じさせます。

技術的にビルの屋上からの離発着が可能となっても、数多く行き交う空のハイウェイとして、河川上空を活用できる川辺の立地は非常に重要です。

私見ですが、大阪都心はもとより、近畿各地からアクセスが容易で広い空間を持つ川といえば何と言っても淀川です。特に十三には万博会場等への舟運基地も設けられる予定で、文字通り陸海空（川）にわたる夢の結節点となる可能性があります。

京都からゆったりと淀川下りを楽しんだ後、今度は一転し、万博会場にひとっ飛びなんて、未来社会に相応しいマニアックな楽しみ方ではないでしょうか。



万博会場への主なルートと
離着陸場（パーティポート）

関係者に聞く

排水機場訪問記

「水が語るもの」編集パートナー　梅田（うめだ） 和男（かずお）
（近畿水管理・国土保全研究会）

はじめに

『水が語るもの』では排水機場の役割や運転管理上の課題等について読者の皆様に紹介しています。

今回と次回は平成26年8月豪雨により由良川中流域の京都府福知山市街地において発生した大規模浸水被害に対する取組について紹介します。この取組は近畿地方整備局（国）・京都府・福知山市の連携により実施されたものです。

由良川の概要

一級河川由良川は京都府・滋賀県・福井県の三府県境三国岳に源を発し、綾部市、福知山市を西流し、その後北東に向きを変え、舞鶴市と宮津市の市境において日本海に注いでいます。上流の南丹市美山町には昭和36年3月に旧建設省により洪水調節を主目的とする大野ダムが竣工（昭和37年4月京都府に移管）。幹線流路延長は146㎞、流域面積は1，880㎢、流域は京都府、兵庫県にまたがっています。



由良川流域及び福知山市街地（法川、弘法川流域）位置図【出典】参考資料2



福知山市街地を守る由良川左岸堤防（岩沢堤）
【出典】参考資料1

福知山市と由良川堤防

福知山市は由良川の中流部に位置する人口約7万5千人の北近畿の中心都市で、明智光秀が築いた福知山城を中心に栄えた城下町です。

福知山市街地を由良川洪水から守る由良川左岸堤防は、明治40年の洪水被害を契機に明治42年に築造され、昭和2年の北丹後地震で被災したため、より強固な堤防に復旧されました。復旧を担当した建設省の技術者（後の初代建設事務次官岩沢忠恭氏）の名より「岩沢堤」と呼ばれています。

平成26年8月豪雨災害

平成26年8月豪雨は本州付近に停滞していた前線が活発化し、8月16日～17日にかけて福知山市及び隣接する兵庫県丹波市に局地的な豪雨をもたらしたもので、気象庁福知山観測所において観測開始以来最大の335㎜／2日を記録しました。

福知山市街地の法川、弘法川流域では排水機場3箇所、近畿地方整備局の排水ポンプ車9台により内水排除が実施されましたが、排水能力を上回る豪雨であったため、床上2，029戸、床下2，471戸の甚大な浸水被害が発生しました。



平成26年8月豪雨による福知山市街地の浸水状況【出典】参考資料3

この状況に対して、8月17日午前7時5分に京都府知事より自衛隊派遣要請がなされ、被害の大きい地区を中心に孤立住居の捜索、救助活動等が実施されました。

column

明智光秀による由良川流路付替えと堤防整備



かつての由良川は現在のJR福知山駅方向に大きく湾曲するように流れていました。天正8年（1580年）に丹波地方を平定した明智光秀は城下町を開くため、竹林を植林した大堤防（「明智藪」と呼ばれ現在も残っています。）を築き、由良川の河道を現在のように付替えたと言われています。[参照：水が語るもの第22号『明智藪の再生活動を通した街づくり』]　【出典】参考資料1

関係者に聞く interview

福知山河川国道事務所
流域治水課長
吉田 達也さん



平成26年8月豪雨災害を受け、国・京都府・福知山市は連携して「由良川流域（福知山市域）における総合的な治水対策について」（以下「総合的な治水対策」）をとりまとめ、対策を進めてきました。福知山河川国道事務所流域治水課長の吉田達也さんにお話を伺いました。

――平成26年8月豪雨で大規模浸水被害が発生した要因は何ですか。

福知山市街地は山地と由良川に挟まれた低平地で、内水被害が発生しやすい所です。台風第11号により由良川の水位が上昇し、下がり切らない状況で前線による豪雨で再び由良川水位が上昇しました。このため由良川から法川、弘法川への逆流を防止する樋門を閉鎖しましたが、排水ポンプ能力を上回る時間50㎜以上の局地的豪雨が3度あり、市内を流れる河川からの溢水も加わり、市街地で大規模浸水被害が発生しました。

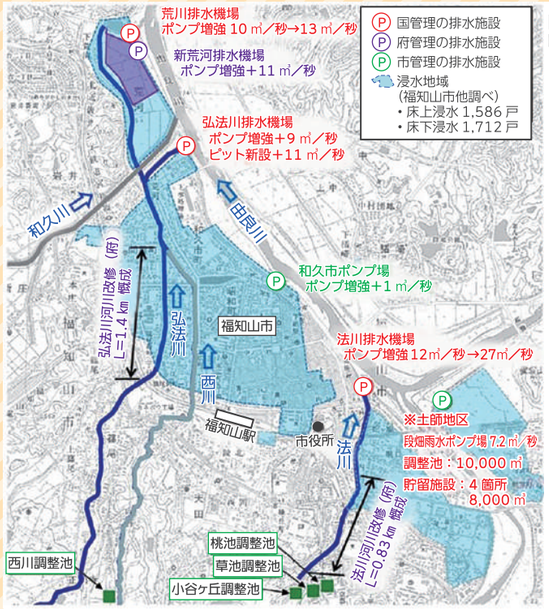
――福知山市街地では過去にも浸水被害が発生しているようですが。

内水被害が発生しやすい福知山市域では、早くから国が内水対策に着手し、昭和49年度に弘法川に合流していた和久川を直接由良川に放流する放水路を完成させました。さらに法川排水機場、荒河排水機場、弘法川救急排水ポンプを整備しました。

――平成26年8月豪雨被害に対する取組みの概要と要点を教えて下さい。

災害直後に国、京都府、福知山市により「由良川流域（福知山市域）における総合的な治水対策協議会」を立ち上げ、三者連携による5カ年の短期対策として同規模の豪雨に対して床上浸水被害を概ね解消する「総合的な治水対策」を同年12月にとりまとめました。この対策は翌平成27年度に着手し、令和2年5月末で概ね完了しました。

国は令和3年3月に「流域治水」を打ち出しましたが、福知山市域の対策は、国、京都府、福知山市の連携により策定した総合的な対策で、由良川への内水排除から支川流域における流出抑制対策等も含まれ、「流域治水」そのものであると言えます。



「総合的な治水対策」概要図
【出典】参考資料5

「総合的な治水対策」による排水機場の新設・増強等の概要

国の施設	既設	新設
弘法川・荒河排水機場	常設 10㎥／秒	可搬式＋3㎥／秒
弘法川排水機場		常設 ＋9㎥／秒
		排水ポンプ車ピット11㎥／秒 相当
法川排水機場	常設 12㎥／秒	可搬式＋15㎥／秒

府の施設	既設	新設
弘法川・新荒河排水機場		常設 ＋11㎥／秒
弘法川・荒河調整池		20万㎥掘削
弘法川・法川河川改修	弘法川 L=1.9㎞	弘法川 L=3.0㎞
	法川 L=0.2㎞	法川 L=1.4㎞

市等の施設	既設	新設
［下水］和久市ポンプ場	常設 8.4㎥／秒	常設 ＋1.0㎥／秒
		合流区域集水管増強
		貯留施設等整備 10,000㎥
［その他］		
オンサイト貯留		20,000㎥
調整池等整備		210,000㎥
ソフト対策		内水ハザードマップ作成による避難警戒意識啓発等

――「総合的な治水対策」における国・京都府・福知山市の役割分担は？

国は由良川本川の樋門閉鎖により生じる内水被害を軽減する排水ポンプ増設等を、府は弘法川、法川の河川改修と内水被害軽減の貯留施設・排水ポンプ新設等を、市は下水道の雨水排水ポンプ増設、流域での雨水流出抑制のための調整池や内水ハザードマップ作成による避難警戒意識啓発等を分担しています。



法川排水機場に増設された
可搬式排水ポンプ

――今回の対策は5カ年の対策ですが、中長期的な課題は何でしょうか。

本対策は平成26年8月豪雨による床上浸水を概ね解消するもので、床下浸水まで解消できるものではありません。また、気候変動により安全度が目減りすることも想定しておく必要があります。このことを踏まえ、流域治水の取組を加速化・深化させるため、新たな浸水対策も視野に入れた「流域治水プロジェクト2・0」を令和5年8月に策定しました。

――ありがとうございました。

参考資料　1.由良川水系河川整備計画【国管理区間】（平成25年6月 国土交通省近畿地方整備局） 2.令和5年度事業概要（福知山河川国道事務所） 3.由良川流域（福知山市域）における総合的な治水対策について（平成26年12月24日 近畿地方整備局・京都府・福知山市） 4.由良川・福知山市街地における総合的な内水対策について（平成27年1月20日 近畿地方整備局「由良川・福知山市街地における総合的な内水対策の計画段階評価に関する有識者委員会」資料③） 5.社会資本整備審議会河川分科会（第65回）資料（令和5年7月28日） 6.平成26年8月豪雨災害の記録（平成27年3月 福知山市）